

今から二年前にこの町の今福小學校で郷土調査の研究發表會があつた。私はその前後に於てこの地を踏むこと數回に及び、且小學校の職員、兒童等の調査による多數の資料を恵まれたので、當時からこの地方の事情を紹介し度いものと思つてゐたがその機會を得なかつた。先般小暇を得て粗稿の一部を整理して概要を記したのであつた。従つて本稿は或る方面のまとまつた研究でなくて、單なる地方紹介に過ぎない。

今福町の大部は秘圖地帯であるから五萬分の

駒ヶ嶽北麓の漁村の形態

— 漁業を主とする街村の形態 —

山口 彌一郎

一 緒 言

昭和五年北海道駒ヶ嶽北麓尾白内・掛淵・砂

駒ヶ嶽北麓の漁村の形態

一以上の大縮尺の地形圖によつて研究することは出來ぬ。コントルラインも抜きとつて二十萬分一帝國圖より他に精密なる圖によつて觀察することが出來ぬのは何より不便である。

最後に今福小學校長宮崎泉氏及び同校の訓導各位は私がこの今福を歩いて見た時多忙の中にもかかはらず案内説明の勞をとられ、且又研究調査物を多く提供せられたる厚意に對し深く感謝致すものである。(昭和九年二月)

原の漁村を調査するの機を得た。

抑々世界に於ける著名なる漁場としての吾が

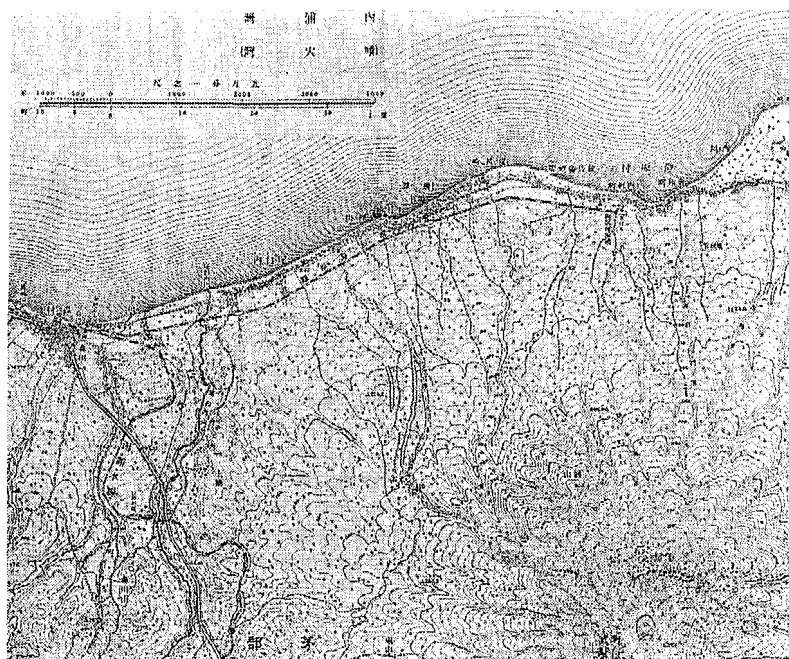
北海道・樺太に於ける聚落はその地方の海岸地形に支配された一種の特徴あるものである。此の漁村に就いて初めて述べたのは田中館氏で同氏は北海道の漁村の特徴は非對稱的な形態を有する街村であることを説かれた。此の論文はかゝる漁村の發生と構成とを更に詳細に吟味せんとするものである。

二 地 形

北海道・樺太は殆んどその全海岸線を繞つて海成段丘が發達してゐる。そして海濱に於ける漁業聚落はこの段丘下に街村をつくるを普通とする。

駒ヶ嶽北麓に於ける聚落は火山麓に於ける地形的制約と噴火灣岸のもつ漁業形態とにより約八軒に亘つて見事な街村をつくつてゐる。

駒ヶ嶽の北麓には裾野が標式的に發達し、その末端部は海に終るが、この



第一圖 駒ヶ嶽北麓の漁村

海岸線と海拔一五〇乃至三〇〇米の高度との間は特別な一地带である。その基底部には緻密な熔岩横たはり、上部は一般に浮石質砂礫に被覆され、これに見事な放射谷が發達してゐる。滯水力に乏しく棘草・灌木が繁茂し、沿岸の聚落到に沿うて約一秆未満の幅に野菜・大豆・小豆・馬鈴薯・蕎麥等の瘠畑があるが、その地質が透水性なるが故に水田は見當らない。

此の地带にある砂原村に於ては農業を主業とするものたゞ一戸で副業とするものは三九三戸あるが、耕地は二六一町八段、一戸當約六段六畝に過ぎぬ。全戸數五九二の中四三二即ち七三%は漁業を主業として生活してゐる。

註一砂原村耕地二六一町八段の中、作付されてゐる面積は二三九町一段、收入に於て二九、四〇七圓で、水産價格五一七、一五四圓の六%に過ぎない。生活は全く漁業に頼つてゐるので純漁業聚落と言ひ得よう。尙ほ畑の平均收入は段當り一二圓内外である。

三 發生及び生長

今より三九〇餘年前即ち天文元年の頃陸奥國

胸ヶ嶽北麓の漁村の形態

津輕郡蟹田村、權四郎なるもの漁期に至れば此の地方に漁夫を伴ひ來り漁藻業に従事したと言ふ。これが内地人渡來の先驅であらう。元龜二年既に戸數三二戸、一村を形成したらしい。

幕府が蝦夷を直轄した安政二年の著なる『東蝦夷地海岸圖臺帳』によれば森村では村の入口より村外迄一一町の街村をなし、家數三二軒、人口一八一一人、蝦夷屋一八軒、蝦夷人八六人、船數六七艘を有した。尾白内村では街村の長さ一〇町、家數二三、人口一〇三、船七一、掛淵村では家數三五、人口二一五、船三五〇、砂原村では街村の長さ一三町、家數九六、人口五〇二、船七八とある。

これに依つて考ふるに森・尾白内・掛淵・砂原總じて一八六戸、人口一・〇〇一人、一戸平均五・四人、現在の一戸平均六・一より少である。それに對する船數は二五一艘、一戸當り一・四艘になつてゐる。砂原村だけをみれば安政二年に於ては一戸當り〇・八艘、現在の戸數は五九

二戸で船數九八九艘、一戸當り一・七艘は先よりはるかに大である。これは漁村の内容の充實した結果とみてよいであらう。

當時の街村の長さを現在に比較すると、尾白内で一・〇九〇米、砂原で一・四一七米で現在の長さの約半分にも達しない。砂原村は砂崎と度杭崎との間にあり、少々灣形をなし、偏南風を避ける好錨地として發達し、灣岸に沿うて街村を形成した様が、前著の著者長澤氏の見事なスケッチに窺ふことが出来る。

掛淵・尾白内も共に最初は船着場として選定され、主として内地よりの移住民が海岸の交通路に沿うて街村をつくつた。又紋兵衛砂原等の地名は天明二年五月陸奥國二戸郡田山村より菊地紋兵衛外六戸の移住した地に名づけられたものである。明治維新當時迄は専ら室蘭との航路の起點となり、殷賑をみたため灣頭の街村は市街をなし商店も相當出來てゐた。然し當時は全體を通觀すれば街村が局部的に發達し不連續的

であつた。

明治六年航路の森港に變更さるゝに及んでこれ等の聚落は急に衰微し、専ら小型の漁船のみ碇泊することになり、殊に夏季は波も静かで個人所有の小船が各砂濱隨所に着き得たので街村が分散的に發達した。然しその後再び漁業戸數の増加につれ、西は尾白内川口より東は砂崎附近迄略々連續的街村が完成するに至つた。

斯くの如く發展し來りたる街村に於ては田中館氏の指摘された兩側の非對稱的構造は最も強く表れた。殊に掛淵では住宅は山の手の側にあるに反して海に面する側には單に納屋・船小屋が見られるに過ぎなかつた。現在では漁獲物の量の増加は漸次加工業に變移し、 $\times$ 粕製造所等が海濱側に新たに増加し、非對稱的關係が再び稍々緩和されて來た。然し昭和二年十二月渡島海岸鐵道の敷設さるゝに及んで漁業に一大活氣を呈し、將來は運輸の關係上街村も停車場に統一された關係に發達するであらう。

漁船に就いて考察すれば現在砂原村にて直接漁撈に従事してゐる戸数は三四戸で、船数は九八九艘、一戸當りで平均すれば一二九艘となる。斯く船数の多きは噴火灣の漁撈に従事する船の餘り大ならざるを豫想し得るものである。事實最近の發動機を具ふる船が稍々當地方の漁船として大型になりつゝある外は、三・四人の漁夫乗り込みを限度とする小型のものに過ぎぬ。されば所定の港灣を必要とせず、隨所砂濱に着け、各戸は所有船を住家に近き船小屋か、露天に上げて置くのである。

四 風向と海流

船着場として先づ第一に考慮しなければならぬのは海岸の地形と風向とである。噴火灣岸の漁獲物中の主なるものは鰺で、六、七月及び一〇、十一月の候がこれの漁獲期である。そして前者は主に南東風、後者は主に西風の卓越する季節である。

北海道南岸を洗つた海流は室蘭沖より砂崎附

近に向つて進み、其の沖合にて二派に分れ、一つは噴火灣岸に沿ひ、他は恵山岬沖合に向ふ。砂崎と度杭岬との間は稍々灣形をなして水深は約五・六尋、偏南風を避くる好錨地で避泊地としてはむしろ森港に勝るが如く思はれる。南部陣屋等もその灣頭近くに設けられて居る。恐らく街村も先づ此の附近に始められたものであらう。

風力も相當強い事はあるが外洋に比すれば波高も低く、灣内魚屬にも特色があり、船も小型のものが一般に使用せられるから聚落の分散的傾向を來した。

五 地形的制約

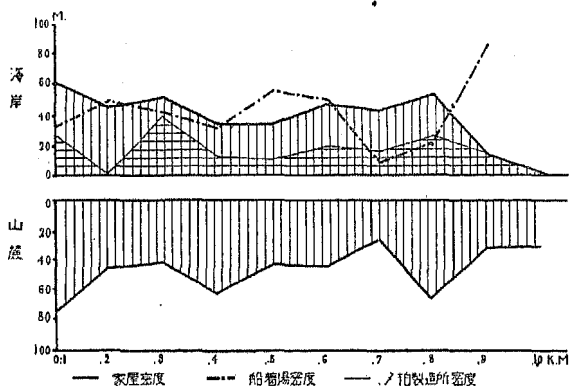
一般に漁業を主とする海濱に沿ふ街村には等密度に廣く家の分布するものと、家の密度の小なる部分と大なる部分が不規則に連なるものがある。これは主として地形的制約による。樺太西海岸では背後の海蝕段丘を解析した谷が沈降し、その附近が削剝されたため海岸に沿ふ幅廣

い岩礁の中に大なる深い灣入が存在し、そこが港となつてゐる。背後に延び得ない聚落は先づ夫々の灣頭に街村をつくり、發達するに従つて次ぎの灣頭の街村と連續する。眞岡・本斗等の市街も詳細に調査するとその連鎖の完成したものに外ならない。外洋に面した漁業地に於て、殊に遠洋漁業の傾向を生ずると漁船は益々大型となり、港灣以外には碇泊出來なくなる。斯くなると聚落も灣頭に近く密集し、單なる街村型の傾向を中止して段丘上に延びる等、眞岡の如く二段都市にまで變形するやうになる。北海道にも此の例は岩内に見られる。

駒ヶ嶽北麓の如き漁村では火山麓が一樣に海岸に迫り、噴火灣が比較的波が静かであり、従つて小型の漁船を使用する近海漁業に従事するが故に聚落は背後に延びず比較的疎に長い街村をつくる。

六 形 態

街村に於ける家屋の密度分布には兩側が略々



第二圖 尾白内東部の聚落密度表 (中央は道路)

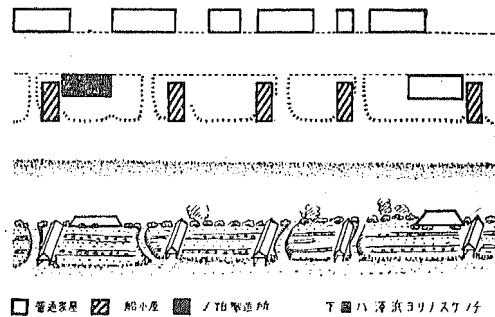
等密度なる場合と非對稱的な場合とある。噴火灣岸では漁業を主業とするための非對稱的街村がある。今この非對稱的關係を次の如く示してみる。

第二圖は尾白内東部約一軒に亘つて兩側の家

屋密度を片側一〇〇米を單位として算出したものであるが、家屋密度は餘り非對稱でないが海岸側にはこの中に種々の建物を

有する點が他の側と著しく異なる。ペ柏製造業等の發達しなかつた以前は現在よりも遙かに非對稱的であつたらしく、現在海濱に沿ふ側に於

第三圖
砂原の非對稱的街村及船小屋の占居狀況



て板葺屋根のバラック式ペ柏製造所が古い四阿の萱葺屋根をもつ納屋の間を著しく埋めて密度を大にしつゝある景觀が窺はれる。

海濱の道

路に沿ふ最初の聚落は山麓側に發達し、海濱側は主として納屋・船小屋等に當てられる。火山噴出物の砂礫層の末端が二・三米の崖に終る場

合は崖下の砂濱には納屋・船小屋を建て得ないから、崖を堅に切つてその間に海に面して傾斜をつけ、奥に巻き上げの挺を造つて船を引き上げて置く。交通路はその崖上を通るため船小屋の側に小道を作つて海に出る通路とし、漁夫の居住家屋は道路の山麓側に位置し著しい非對稱的街村をつくる。これ等は段丘下に發達した森町以西本茅部・石倉附近の街村にも見られる現象で、崖を掘り割つて船小屋をつくる如き事はないが、地形的制約により交通路が海濱に近く走るため居住家屋は主として山麓に位置し、海濱側は單な納屋が散點するに過ぎない。

尙ほ飲料水による統制如何の調査も試みたが一般には稍々鹽分を含む不良なもので、三米乃至七・八米位の深さをもつ井戸より吸み上げて使用して居り、非對稱的街村が飲料水に依るものとは認め得なかつた。

位置の北偏、交通の不便は鮮魚の搬出を困難ならしめるから、漸次漁獲物の増加につれ加工

しなければならぬ。漁獲物に加工する様になつてから非對稱的街村型に變化を來した。即ち陸上あげした漁獲物の處理は海濱の側が適してゐるから、 $\wedge$ 粕製造所等の非住家屋が海濱側に發達した。漁獲物製造業戸數は砂原村のみで本業、副業併せて一三一戸に達し、漁撈家屋三四一戸に對し三八%に相當する。

今他の例として稚内港を見る。こゝは都市の形態を具へてゐるが核心地帶を離れて純漁村に近くなると、段丘下の交通路に沿うて非對稱的傾向を生じた街村となる。これは漁獲物移出港として漁業倉庫等が海濱側に發達し反對側の居住家屋と相對して非對稱を示してゐるものが多う。

七 漁業組織の變遷

次ぎに尙ほ考慮しなくてはならないのは此の村の漁業組織の變遷である。最初は多く個人所有の小船に依つて主として近海の漁業に従事したが、それが發動機を具ふる漁船に變り、又網の

種類も大規模なものが使用される様になつて小資本の個人で經營が困難になつて來た。

現在當沿岸で使用する大謀網は沿岸より一〇〇米内外の沖合にガラス製の浮玉を附して敷設して置くもので一張の價約三、〇〇〇圓を要する。到底漁夫個人で所有することは困難で三〇—四〇人の漁夫が組合組織にして資本を合併するか、大資本家の許に單なる傭ひ漁夫として働かなければならない様になる。船は發動機船で朝夕二回位網を廻つて漁獲物を蒐集し、これを大量に處理するために一釜又は二釜を所有した家内工業的製造より漸次大規模な製造場の發達へと變遷してゆく。

斯くして街村密度は再び不均質にと向つて行く。即ち大きな船を碇泊し得る場所、製造場の位置的關係及び嘗つて小船によつて森、その他に運航した漁獲物或は $\wedge$ 粕等の製造品を直接汽車に積み込む爲めの停車場により近い位置に街村の密度を増加する傾向等を生じてゐる。

八 結 論

以上の調査を要約すれば次の如くなる。

1、街村を生ぜしめた主なる原因は背後に駒ヶ嶽を負ふ地形的制約と、海岸に沿うて走る交通路による統制とである。

2、最初の小規模な漁業には特殊な漁港を必要としないから聚落は分散的に發生し、漸次發達して連續的街村となつた。殊に掛淵と室蘭との連絡が森に變更されて街村が一層完成された。

3、漁業を主業とし地形と交通路との關係で納屋・船小屋・漁干場が海濱側に、居住家屋が山麓側に發達し非對稱的街村をつくつてゐる。

4、漁獲物を加工する様になつて聚落の形態上は對稱的になつたが、構成上は非對稱的である。

5、停車場ができて附近の聚落密度が大になつてきた。

6、漁業組織が變遷し、統一されてきて局部

的に街村が密集的な傾向を生じてゐる。

終りに指導・校閲を賜つた東北帝大講師田中館秀三氏並びに古文書等の閱覽に特種の便宜を與へられた函館圖書館長岡田健藏氏、資料蒐集に助力された森町役場、砂原村役場、渡島海岸鐵道會社、砂原小學校等に厚く感謝の意を表する。(昭和六年十二月稿)

參 考 文 獻

加藤武夫 駒ヶ嶽火山地質調査報文

震災豫防調査會報告明治四十年十二月

長澤盛至 東蝦夷地海岸圖豪帳

(函館圖書館藏) 安政二年十月

田中館秀三 日本地理大系北海道樺太篇

昭和五年二月

佐藤喜代吉 北海道旅行記

(函館圖書館藏) 明治二十三年八月